

保育施設設計にみる子ども用デザインの考え方 — 北欧を中心に世界の国を比較してみると —



北浦 かほる
NPO法人子どもと住文化研究センター理事長
(大阪市立大学名誉教授)

5. 食事室・就寝室や夜間室などの生活空間

空間計画だけでなく子どもの生活のあり方まで考えて、食事・就寝・夜間室などの保育空間を使っていたのが、デンマークでした。特に、子どもの生活時間を守るため夜遅く 20 時以降に帰る子を帰宅させず、そのまま保育所に宿泊させるシステムをとっていたことでした。

コペンハーゲンの保存地区の古いビル内にある夜間室は家庭的雰囲気を重視して造られていました。ベッドルームだけでなく、ゆったりくつろげる夜間専用のリビング(図 1)や、サニタリー(図 2)が設置されていました。2 歳まではナッピングルームを使って昼寝させますが、年長児に昼寝させるか否かは親が決めます。夜用には個人用ベッド(図 3)が用意されていました。サニタリーには大型バスタブやシャワー設備があり、清潔感あふれる空間になっています。

デンマークの 0~2 歳までの乳児用のナッピングスペース(図 4)は、赤ん坊時から耐寒性を養うために造られています。外気温が -10°C までは半戶外スペースで乳母車に乗せて顔だけ出して昼寝させると効果的なので、どの保育園でも半外部空間に赤ん坊を寝かせていました。

Bornehuset Sondervang aben dag og nat(図 5)は郊外の夜間保育園です。朝食と夕食は食堂(図 6)でとることになっています。5~6 人用の食事専用テーブルをはじめとして、少人数構成の保育や家庭用照明器具の使用などの配慮が家庭的雰囲気を醸し出しています。宿泊は 15 人までで、シャワー室と個人用寝具を保管する棚が設けられていました。

イタリアでは夜間保育は皆無に近く、ベビーシッター対応が主流を占めていました。図 7 はアルコバレノ乳児保育所の昼間の食事風景です。図 8 は半公立の TOTEM の昼食風景ですが、この施設では食事は一切作っていませんでした。宅配業者が直前に配送してきたものをそのまま子ども達に配っていました。

イタリアでは夜間室のセッティングは設けられておらず、シートも寝具も個人所有になっていました。浴室はなく、トイレも狭い空間の上、子ども用便器の数は少なく、夜間利用はほとんど不可に近いものと言えます。昼寝は薄いマット状の寝具の上で寝かせていました(図 9)。

図 10 はアメリカの国際空港近くの夜間保育所パルケア(6 月号参照)の幼児クラスの小規模な食事コーナーです。

同じくアメリカの、昼間保育のモンテッソリスクールでは多目的室(図 11)で、小さな子から年齢順に昼食をとっていました。共働きで中の上の階層を対象としていましたが、先生達が、子どもの食べ残しの食品を紙食器ごと、子どもの目の前でゴミ箱に次々投げ捨てていくのには驚きました。文化差や生活習慣の違いではあるものの、教育効果の問題について



図 1 子どもの絵が貼ってあるリビング



図 2 サニタリー

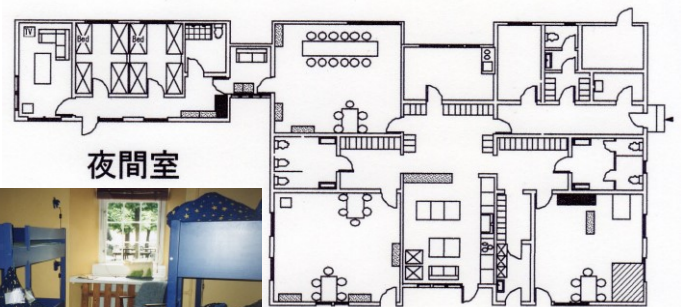


図 5 Bornehuset Sondervang aben dag og nat 平面図



夜間室

図 3 個人用ベッド



図 4 ナッピングスペース



図 6 夜間園(図 5)の食事室



図 7 アルコバレノ乳児保育所昼食



図 8 TOTEM の昼食



図 10 パルケアのスナックの時間



図 11 モンテッソリスクール昼食



図 17 地下の食堂(韓国)



図 18 昼食風景(韓国)

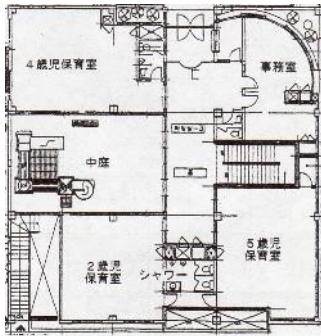


図 16 韓国夜間保育園平面図 1階と地下階



図 19 床に布団で昼寝(韓国)



図 14 幼児トイレ(米)



図 20・21 トイレとシャワーが1室に(韓国)



図 15 パルケア・コッツで昼寝(米)



図 9 TOTEM昼寝(イタリア)



図 12 女子用夜間室(米)



図 13 女子用クラブ室(米)

考えずにはおられませんでした。

Toyota Motor Manufacturing Kentucky の企業内保育所では 3 歳以上から専用の食事室(7 月号参照)で食事させていました。学童保育の子どもを対象とする夜間室やクラブ室は、男女別に分けてつくられていました(図 12・13)。図 14 は幼児用トイレなので男女兼用になっていますが、4 歳以上になるとトイレやシャワー室は男女別々に造られています。

欧米では子どもにトイレを一斉使用させないので、衛生陶器の数は少なくなっています。就寝時には、夜間室の片隅に積み上げてあるコッツ(図 12)を、子どもが寝室内の好きな場所に持って行って寝ます。一斉に寝るのではなく、個人が思い思いの所で寝ています。コッツというのは、プラスチック製の薄い皿状のベッドで、シーツが取り付けられています。このコッツはパルケア(図 15)でも使われていました。欧米でもシーツや布団の所有・管理のあり方は多様で、浴室設備の充実度も園によってばらつきがみられました。

日本ではトイレの一斉指導で多数の便器が必要な上、トイレとクラス室を扉無しで連続させる事が多く、水処理や臭いの問題が多発していました。専用の食堂がある園は殆どなく、昼食はクラス室を使っています。夜間室が取れない園が多く、夜の就寝もクラス室でしていました。

図 17 は韓国の食堂です。座卓を囲んだ床座になっています。夜間室は無く、あっても屋根裏の極端に低い天井や、便所からアクセスする様な条件の悪い部屋でした。クラス室を片付けて薄い布団で昼寝(図 19)させており、夜間の就寝時も同様でした。遠距離運送業等の親などで 1 週間～1 ヶ月間も預け放しのケースが見受けられました。

韓国の浴室はバスタブが無くシャワー設備のみの所や、シャワー設備(図 20・21)が便所内に設けられていたりしました。小便器と共に大便器がパーティションで区切っただけで設置されており、ここでも水処理や汚れ、臭いの問題が多発していました。デンマークではトイレにトップライトが多用されており、トイレとクラス室が扉を介して隣接していたのでどの園のトイレも清潔感がありました。

こうして幾つかの国の保育環境を較べていくとその充実度は、子どもを大切にしている国の姿勢や、求められている生活の価値基準と深く関わっていたことが分かります。

食事や就寝・サニタリー設備のあり方等子ども達の具体的な生活面での問題をどれだけ把握し解決出来ているかは、子どもを見守る目と実践の努力無しには成立しません。

デンマークの素晴らしい施設と子どもを大切にしている思想はもとより、アメリカの Ms. Angeia の、素朴な手作りの保育空間(9 月号参照)での Family child Care が印象的でした。

■北浦かほる

大阪市大卒。倉敷建築研究所(現・浦辺設計)を経て大阪市大名誉教授。帝塚山大学教授。学術博士。NPO 法人子どもと住文化研究センター理事長。居住空間デザイン学及び環境心理学。主著書に、「世界の子ども部屋」「住まいの絵本に見る子ども部屋」「インテリアの発想」「インテリアの地震対策」

